

銭湯

酔っ払いが脱衣場で騒いでいる。番台へ湯銭を払おうとした私は寸前にその光景に目を奪われた。

小柄な男である。年の頃は四十前後であろうか、年齢の割りに筋肉質の身体で、それが土工のような仕事に従事していることを連想させた。背中には、いっぴいの墨が入っている。相棒が一人いた。こちらは五十すぎにみえる。二人とも目付きが険しい。一癖も二癖もありそうな感じである。

二、三人の湯上り客が、それとなく遠巻きにして二人を避けている。それが又、彼等を凶に乘らせているようだ。

男が千鳥足で下着を脱ぎ始めた。

『バカヤロー、ふざけんじゃねえ・・・この野郎、なめんじゃねえよ!』

薄汚れたアンダーシャツが首の所で引っ掛って身体がくるりくるりと回転した。その度に床へ目掛けて頭から突っ込んでしまいそうな有様だった。

番台の主人が眼鏡の奥で困惑の表情を見せている。すぐにでも一一〇番しかねない様子だ。

仕切りの向こうの女湯の脱衣場でもこちらの気配が伝わって息を詰めている感じがする。呂れつが廻らなくともドスの利いた男の声が不気味に響き渡っているにちがいない。

私はいつものごとく二百五十円を支払って入浴料とカミソリを求めた。

沈丁花が香る三月の夜、番台の真上の柱時計が午後十一時三十分を指している。難を避けるように片隅のロッカーへ衣類を投げ込んでから、そそくさとガラス戸を開けた。湯気が立ち込める中に十人足らずの入浴客がいたが、脱衣場の異様な空気がこちらへも伝わってきたのか、各々が怪訝な顔を向けていた。

今夜は湯が少し熱い。二槽の湯舟の中間にある温度計が四十三度を計っていた。春といっても未だ彼岸前だ、往來を冷たい風が吹きつけて心身が冷え切っている。

身体を洗ってから湯舟へ入る。少しづつ身を沈めて手足を存分伸ばす頃は、何ともいえぬ法悦がある。束の間、私は目を閉じた。

しばらくすると三人の青年が私と同じ湯舟へ入ってきた。と追いかけるように、大声と共に例の二人組みがガラス戸を開けた。いやーな感じだ。いきなり湯舟へ飛び込もうとして相棒に制止させられた。私は入れ替わるように、するりと洗い

場へ逃げ出していく。因縁でも付けられたらたまらない、こういう手合いには、さわらぬ神に崇りなし、思わず、くわばらくわばらと唱えた。

終了間際の入浴客はほとんど常連といつていいのだろう、ほぼ決まった頃に必ずやって来る人達で、今、私が座っている洗い場の横に長い鏡を挟んで向こう側の初老の男は年じゅう歌を唄っている。

私がこの（繁の湯）へ通い始めた頃、この男を少々疎ましく思った。年甲斐も無く流行歌を唄っていたからだ。相応に小声で小唄か都都逸を口ずさむぐらいであれば一目置こうというものだ。ところが（黄色いサクランボ）（高校三年生）とか（上海帰りのリル）のナツメロ、果ては最近の（くちなしの花）という展開になると、困った気持ちを通り過ぎて不快な気分が生じてくる。鼻歌なら愛嬌だが朗々堂々と唄われると何となく落ち着かないのだ。変人とも名物ともつきかねないところで、しかし、男は周囲に構わず唄い続けている。

だが生憎、今夜は状況が悪い。下手をすると先刻の酔っ払い、墨の男の餌食になりかねない。湯煙が立つ中で私は二人連れの男達を探した。案の定、湯舟の中で諍いが起こりそうであった。男が三人の青年に向かって湯水を浴びせ始めたのである。

『てめえ、この野郎、何か文句があるのか、おう、俺の顔になんか描いてあるんか。』

立ち上がった一人の青年の顔に男のかける湯が正面から掛かる。青年の体軀はたくましい。男をきつと睨み付けた。一瞬、険悪な空気が浴槽の上を流れる。連れの青年が肩を抑えて止めた。相手をするな、という仕草である。青年が墨の男に挑みかければ忽ちのうちに轟沈させられてしまう事は明白だ。ハラハラしながら私はその成り行きを見守った。墨の男も初めの勢いがなくなった。青年の肉体と気迫に圧されたのかも知れない。醜態を誤魔化すように自らの顔をざぶんと湯の中へ入れる。どうやら、大事には至る事はなさそうだった。湯の中から頭を上げた男は、それでも、ブツブツ小声で御託を並べている。こちらへとばつちりが廻ってはたまらない。私はあわてて鏡に向き合った。男は湯舟に沈んでいたが、どかつとして出てくると洗い場をキョロキョロ見回す。

すると、件の男の唄声が響き渡った。

『あの娘、よい子だ、気立てのよい子、

リンゴに似た、可愛い子

誰方が言ったか、うれしい噂、

軽いくしゃみも、飛んで出る、

リンゴ可愛いや、可愛いやリンゴ』

緊迫な時が終わったのを確かめての唄声である。蛇口の栓を開く音や水の流れの音を縫^ぬって唄声は朗々と聴こえてくる。こんな時には止せばいいのにと私は思った。また一波乱起きたら面倒だ。般若の刺青が不気味にゆれ動いて男が唄声の方に近づく。その気配を察して唄声の常連は声を小さくする。墨の男は唸り声を発しながらその声の後ろへピタリと座る。唄声が止まる。束の間の静寂。

『あかいーリンゴにくちびるよせてー

だまあってみている、あおーいそら、

リンゴはなんにも、いわないけれど、

リンゴのきもちーは、よくわかるー

リンゴ、かわいや、かわいやーリンゴー』

般若が上下にゆれ動く。彼も唄い始めたのだ。私は驚いた。内心、へーえ！と思った。低い唸り声であるけれども、はつきりと唄いだしたのだ。二つの声が混じり合った。

一番の歌詞を何度も繰り返しながら唄っている。狼藉を働こうとした人物とは到底思えない想像も出来ない事であった。誰かがパチパチと拍手した。連れの男だ。張り詰めた湯と洗い場の空気が、解^ほれて行く。三人の青年はすでに脱衣場の方で帰り支度をしている。

その内、私もその二人に合わせて唄いたい衝動に駆られた。

『赤いリンゴに、くちびるよせて・・・』

敗戦の焼け跡で陣地ごっこをして遊びまわったボロ服の子どもの頃の私と仲間達の姿が蘇ってきた。空は深く澄み切っていた。そして空に向かってリンゴの歌を思いつ切り唄ったいたずら盛りの少年の頃の記憶が・・・

番台の主人が恐る恐るガラス戸を開けて心配顔で覗いている。

* * *

遠い昔、私が銀座ですし屋を商っていた頃の話である。